

九阜会 若竹能

吉野天人 大江山 天人揃

第1日
令和6年 2月25日(日)
午後1時開演 (午後12時30分開場)

水光山色

善知鳥 融

第2日
令和6年 7月21日(日)
午後1時開演 (午後12時30分開場)

【神楽坂・矢来能楽堂】



中森 健之介
(なかもりけんのすけ)
「融」シテ

1987年生
(公社)能楽協会会員 (公社)観世九阜会理事
三世観世喜之および観世喜正に師事
千歳 2014年 石橋 2019年
道成寺 2021年
1989年2歳で初舞台(仕舞「狸々」)
安宅、望月、烏帽子折の子方を勤める
(公社)鎌倉能舞台評議員



奥川 恒治
(おくかわこうじ)
「善知鳥」シテ

1965年生
(公社)能楽協会会員 (公社)観世九阜会理事 三世観世喜之に師事
「奥川恒治の会」「華友会」主宰
石橋 1993年 狸々乱 1994年
道成寺 1999年 望月 2011年
安宅 2013年 翁・砵 2018年
(一社)日本能楽会会員 (重要無形文化財総合指定)
埼玉県蓮田市教育専門推進委員会



桑田 貴志
(くわたたかし)
「大江山」シテ

1971年生
(公社)能楽協会 (公社)観世九阜会会員 三世観世喜之に師事
「桑田貴志能まつり」「茉莉会」主催
千歳 2001年 狸々乱 2004年
石橋 2006年 道成寺 2009年
安宅 2019年
シンガポール演劇学校 Practice Performing Arts Schoo 能楽講師
(一社)日本能楽会会員 (重要無形文化財総合指定)



鈴木 啓吾
(すずきけいご)
「吉野天人
~天人揃」シテ

1963年生
(公社)能楽協会会員 (公社)観世九阜会理事 三世観世喜之に師事
一乃会主宰
道成寺 2001年 砵 2013年
安宅 2016年 翁 2020年
著書『能のうたー能楽師が読み解く遊楽の物語』(新典社)
(一社)日本能楽会会員 (重要無形文化財総合指定)

わかたけのう 若竹能とは

観世九阜会当主・観世喜之門下の毎月行われる若手稽古会「若竹会」より発足し、研究公演として、平成5年より公開公演を行って参りました。さらなる芸の向上を目指し、活動をさせて頂いております。

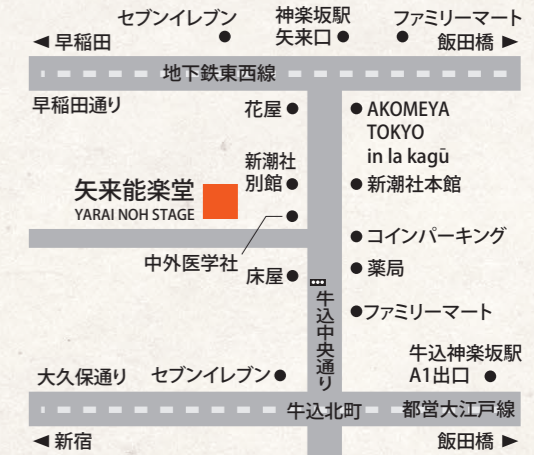
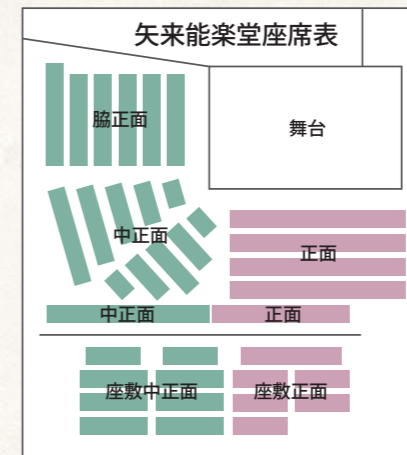
今後とも何卒よろしくお願ひ申し上げます。

九阜会 若竹会一同

若竹能チケット料金 <全席指定> (税込)

- 正面席…………… 6,600円
- 脇正面・中正面席……5,500円
- 学生券(脇正面・中正面)・3,300円
※要学生証(26歳未満)・未就学児童入場不可
- ◆ チケット発売日: 12月6日(水)

<2月・7月セット割引券>
1000円引き
(セット券2月25日(日)まで発売)
(矢来能楽堂のみ取り扱い・学生券を除く)



地下鉄東西線神楽坂駅下車 矢来口より徒歩2分
都営大江戸線牛込神楽坂駅A1出口より徒歩5分
駐車場はございません。近隣のコイン駐車場をご利用ください。

やらいのうがくどう
<矢来能楽堂>
東京都新宿区矢来町60番地 TEL 03-3268-7311

*記載の演目・演者等はやむを得ない都合により変更になる場合がございます。
*許可のない録音、撮影は一切禁止です。
*上演中、携帯電話は電源からお切りください。
*演能やほかのお客様の迷惑となる行為はご遠慮願います。場合によっては退場していただくこともございます。
*最新情報は矢来能楽堂ホームページや公式X(旧ツイッター)などでも随時お知らせいたします。
<http://yarai-nohgakudo.com/>

チケット申込

カンフェティ^{Confetti} 観劇ポータルサイトオンラインチケットサービス

■WEB予約
<http://confetti-web.com/>
ご予約後すぐにセブン-イレブンでチケットが受け取れます。



2月公演



7月公演

■電話予約 カンフェティチケットセンター
0120-240-540 (受付時間 平日 10:00~18:00)
予約有効期間内に、払込票番号をお近くのセブン-イレブンのレジまでお持ち下さい。

矢来能楽堂

<https://yarai-nohgakudo.com>
お申し込みフォームからご予約いただけます。



お問合せ<矢来能楽堂>

電話: 03-3268-7311 FAX: 03-5261-2980
ticket@yarai-nohgakudo.com

主催・公益社団法人 観世九阜会

◆二月 若竹能

令和六年二月二十五日(日) 午後一時開演

(午後十二時三十分開場)

ツレ 金子仁智翔
ツレ 石井 寛人
ツレ 奥川 恒成

シテ 鈴木 啓吾

能 吉野天人

Yoshinotennin 天人揃

ワキ 福王 知登

アイ 野村 裕基

大鼓 柿原 光博 太鼓 姥浦 理紗
小鼓 幸 正昭 笛 熊本俊太郎

後見 永島 充
遠藤 和久

地謡 中森健之介 奥川 恒治
長山 耕三 駒瀬 直也
遠藤 喜久 中所 宜夫

休憩十五分

仕舞 嵐山 小島 英明
田村 坂 真太郎
龍田 観世 喜之
雲雀 遠藤 和久
山姥 中所 宜夫

地謡 筒井 陽子
佐久間二郎 奥川 恒治
中森健之介

シテ 桑田 貴志

(午後二時五十分頃)

休憩十分

能 大江山

Ooeyama

ワキ 福王 和幸

アイ 深田 博治
アイ 野村太一郎

大鼓 佃 良太郎 太鼓 大川 典良
小鼓 森澤 勇司 笛 八反田智子

後見 奥川 恒成
遠藤 喜久

地謡 坂 真太郎 佐久間二郎
長山 耕三 中森 貫太
小島 英明 永島 充

終演予定 午後四時十分

◆七月 若竹能

令和六年七月二十一日(日) 午後一時開演

(午後十二時三十分開場)

子方 小島 史織
ツレ 佐久間二郎

シテ 奥川 恒治

能 善知鳥

Uton

ワキ 館田 善博

アイ 内藤 連

大鼓 安福 光雄 笛 平野 史夏
小鼓 田邊 恭資

後見 坂 真太郎
鈴木 啓吾

地謡 石井 寛人 小島 英明
桑田 貴志 中所 宜夫
長山 耕三 永島 充

休憩十五分

仕舞 岩船 金子仁智翔
清経 奥川 恒成
松風 観世 喜之
玉之段 長山 耕三
藤戸 駒瀬 直也

地謡 筒井 陽子
遠藤 和久 貫太
坂 真太郎

(午後三時頃)

休憩十分

能 融

Tohoru

シテ 中森健之介

ワキ 野口 能弘

アイ 中村 修一

大鼓 亀井 広忠 太鼓 小寺真佐人
小鼓 飯富 孔明 笛 熊本俊太郎

後見 石井 寛人
観世 喜正

地謡 金子仁智翔 佐久間二郎
奥川 恒成 遠藤 喜久
桑田 貴志 鈴木 啓吾

終演予定 午後四時二十分

今回の若竹能は「山光水色」をテーマに、二月は山の風景を表す「山光」、七月は海の風景を表す「水色」にちなんだ能をそれぞれ上演します。

吉野天人

都人(ワキ・ワキツレ)たちが吉野山の桜を見ようと思いい立ち、都から吉野へと向かう。

そこで満開の桜を眺めていると、どこからともなく一人の里女(シテ)が現れる。都人がその素性を尋ねると、女は「この山里に住むものが、花の美しさに惹かれてこの地にやってきた」と述べ、実はこの吉野の花に惹かれて舞い降りた天人であると告げると、信心をなすならば奇瑞を見せようとのめかし、花咲く吉野の山中に消えていく。

やがて夜も更けると、不思議なことに空から花降り音楽が聞こえ、なんとも馨しい香りが山々を包み込む。するとそこへ本体を表した天人たち(後シテ・ツレ)が降臨し、古より伝わる天人の舞を披露してみせる。やがて天人たちは泰平の御世を寿ぎ、満開に咲き誇る花々を愛でつつ舞の袖を翻すと、再び雲の上へと飛翔していく。今回は「天人揃」の小書により、後場に数名の天人(ツレ役)が登場し、二層華やかな舞台演出となる。

大江山

大江山の鬼である『酒吞童子』を退治するよう勅命を受けた源頼光(ワキ)と藤原保昌(ワキツレ)たちは、山伏に変装して大江山へ赴く。そこで対面した酒吞童子(シテ)は、比叡山を追われた為この大江山に到った自らの境遇を語ると、頼光たちは童子へ同情の言葉を投げかける。それを聞いた童子はすっかり気を許し、やがて酒宴を開いて一行をもてなすと、自身も酒に酔いつぶれそのまま寝所へと入って行く。

そこで、頼光たちは武装を整えが童子の寝室に攻め入ると、なんと酒吞童子は恐ろしい鬼の姿となっていた。やがて、騙されたことに激怒した童子は一行に襲いかかるが、死闘の末、ついにその首を頼光に打ち落とされてしまう。ワキ方が多数登場する珍しい能で、ストーリーも分かりやすく童話風な内容となっている。

善知鳥

諸国一見の僧(ワキ)が、旅の途中に立山(現・富山県)の地獄谷を訪れると、どこからともなく一人の老人(前シテ)が声をかける。老人は「もしも陸奥の方へ下るならば『外の濱』に自身の妻子が住んでいる。その者たちと共に、どうか後世を弔ってほしい」と涙ながらに頼む。やがて老人は証拠の品として自身の衣の袖を僧に与えると、立山を下る僧を見送り消え失せる。

言われるままに「外の濱」に辿り着いた旅の僧は、そこで獵師の妻子と出会い、先ごろの出来事を告げる。そして携えてきた衣の袖を見せると、妻ははらはらと涙を流す。それこそは、まさしくこの世を去りし夫の衣であった。そこで僧は亡霊の望み通り弔いを始めると、生前に善知鳥の雛鳥を殺した罪で地獄に堕ちた獵師の亡霊(後シテ)が現れ、絶え間なく続く責めの苦しみを見せると、重ねての回向を頼み消えていく。

「立山地獄信仰」をもとに考案された能で、人間が本来持ち合わせている「業」の深さを生々しく描写している。

融

東国より上ってきた旅の僧(ワキ)は、かつての融の大臣の旧跡である六条河原の院を訪れる。するとそこへ一人の老人(前シテ)が、肩に田子を担いで現れる。老人は自身を『汐汲み』であると述べ、かつてこの廃墟が塩釜の浦と呼ばれていたことを物語る。旅の僧の求めにこの辺りに見える名所の数々を教える。やがて日も暮れ行くと、目の前の老人は海水もない廃墟にて汐を汲むと見るや、そのまま姿を消して行く。

不思議の出会いに、最前の老人は融の化身と悟った僧は、夜もすがら再びの出会いを待っていると、果たして夢の中に融大臣の霊(後シテ)が現れ、月明かりの下、往時を偲びつつ美しい舞を舞うと、再び月の都へと帰っていく。人間の栄枯盛衰をテーマに世の無常や変転といった仏教理念を基本とした能。全編を通して『月』のイメージで統一された、抒情詩的な演目と言える。